

平成11年度

アイヌ語ラジオ講座 テキスト

10月▶12月

Vol.3

1999

『アイヌ民譚集』とは

胆振の登別（幌別）に伝わっていたパナンペ ウウェペケレ Pánampe uwépeker と呼ばれる昔話を『アイヌ民譚集』から1つ選び、読んでいきましょう。今回の講座で取り上げるのは、その第3話パナンペ オニンコッ Pánampe onínkot 「パナンペ尻滑り」です。

『アイヌ民譚集』は、登別（幌別）出身のアイヌ語学者知里真志保がまだ第一高等学校の生徒であったころ、主に故郷の登別（幌別）で採録して編んだ昔話集です。昭和12年（1937年）に郷土研究社から出版されました。全体を知るのに郷土研究社版の閲覧が難しければ、『知里真志保著作集 1』（平凡社）あるいは岩波文庫をご覧ください。

知里真志保は、金田一京助が創始したアイヌ語の科学的な研究を受け継ぎ、特にアイヌ語の民俗語彙の分野で大きな業績を残した偉大な言語学者です。その青年時代の作品に触れてみたいと思います。

アイヌ口承文芸の特色

口承文芸はアイヌ文化の中で大きな地位を占めています。金田一京助が筆録した日高沙流のワカルパが語ったユカラ（ユーカラ）「虎杖丸（いたどりまる）の曲」をひもとけば、アイヌ語の複雑な形態法の限りを尽くした、こりにこった詩句の連なりに驚かれるでしょう。パスイヤマキリの鞆の上に細部までゆるがせなく彫られた文様を見る思いがします。過去のアイヌ文化が私たちに残してくれた最大の遺産と言ってもよいかと思えます。ただ、現代の私たちには極めて難解かつ長大で、ユカラの完全な解読は未来のことに属します。きっと将来のアイヌ文化をはぐくむものになることなのでしょう。なお、ユカラは英雄叙事詩とも呼ばれています。

口承文芸はユカラだけではありません。もっとやさしく、より単純な形態法で歌われる叙事詩にカムイカラ（カムイユーカラ）というものもあります。これは神謡と呼ばれています。「銀の滴降る降るまわりに」という詩句で有名な知里幸恵の『アイヌ神謡集』は13編のカムイカラからなっています。

さて、アイヌ口承文芸はユカラやカムイカラのように叙事詩として歌われるものばかりではありません。和人の昔話のように日常語に近いアイヌ語で語られ、親しみやすいものもあります。これを登別（幌別）のアイヌ語でウウェペケレと呼びます。

ユカラは英雄ポイヤウンペのいくさの話です。カムイカラは主に動物神の物語です。ウウェペケレの主人公は人間であることもあれば、動物神であることもあります。いずれにせよ、主人公が自らの体験を一人称で語るというものです。たとえば「ある日私は川を下って行き、

人間の村の上にさしかかりました。上空から下を見下ろすと…」のように主人公である「私」の視点から語られるのです。これが「一人称説述体」と呼ばれるアイヌ口承文芸の特色をなす形式です。ところが、ウウェペケレの中には一人称説述体で語られず、「パナンペがいた、ペナンペがいた。ある日、パナンペは山に行って…」のように「側述体」で語られるものもあります。このテキストで取り上げた「パナンペ尻滑り」はこの形式で語られるものです。

内容の面でのアイヌ口承文芸の特色は、主人公の出自、つまり主人公が何者であるかを解くことにあります。先に述べましたように、物語は「私はどうこうする」というように展開しますが、肝心の「私」が何者であるかは普通述べられません。多くの物語では話が進展するに従って徐々に「私」の正体がはっきりしてきます。主人公の名あてが聞く者の興味を引っ張って行くのです。ユカラでは主人公のポイヤウンペ自身が自分が何者であるのかわかっていません。ポイヤウンペのいくさと冒険は自己を発見するためになされているともいえましょう。

ところで、側述体で語られるパナンペのウウェペケレは、最初から主人公が誰であるかわかっていますし、パナンペが自己の出自を探求することがモチーフになっているわけではありません。このようにパナンペウウェペケレは語りの形式の点でも、また内容の点でもアイヌ口承文芸の中で独特の地位を占めているのです。

パナンペウウェペケレの構成

パナンペウウェペケレでは、まず、パナンペが奇想天外な方法で得難いものを得ることに成功します。それを妬むペナンペがそのやり方をまねて失敗し、無様な死をとげます。この奇想天外な方法とペナンペの失敗が物語の興味を引くところです。

「パナンペ尻滑り」のあらすじ

パナンペは丘の斜面に笹竹のくいを尖った先を上にして立て、その上に雪をかけ水をまいて凍らせました。それからクマを呼び寄せて尻滑りをやろうと誘いました。クマはパナンペに先に滑るようと言いました。パナンペは自分の身を軽くして難なく滑りおりました。クマは喜んでパナンペがしたように滑りましたが、笹竹が肛門に突き刺さって苦しみもだえしました。パナンペはクマの喉を絞めて殺してしまいました。

ペナンペは、パナンペが美食の長者として暮らしているのを見てパナンペにその訳を尋ねました。パナンペが親切に教えてあげたのに、ペナンペは悪態をついて山に行ってしまうました。

ペナンペはパナンペがしたと同じようにクマを尻滑りに誘いました。クマは先に滑って見せるようにといます。ペナンペは丘のてっぺんから滑りおりたのですが、自分の身を軽くすることをすっかり忘れていたために笹竹が肛門に刺さってしまいました。苦しむペナンペを見てクマはペナンペを打ち殺してしまいました。

 今日のポイント
パナンペ Pánampe と
ペナンペ Pénampe

今日の一言：
パナンペ アン。 ペナンペ アン。
Pánampe án. Pénampe án.
パナンペがいた。 ペナンペがいた。

パナンペ	アン。	ペナンペ	アン。
Pánampe	án.	Pénampe	án.
パナンペ(が)	いた	ペナンペ(が)	いた
パナンペがあった。ペナンペがあった。			

シネアントタ	パナンペ	キムタ	オマン	ワ	フルコトツ	タ
Shinéanto-ta	Pánampe	kím-ta	omán	wa	húr-kotot	ta
ある日	パナンペ(は)	山に	行っ	て	丘の斜面	に
ある日パナンペは山へ行って山の斜面に						

トブ	ウライニ	カラ	ワ	エホロカノ	ロシキ、
tóp	urai-ni	kár	wa	ehórka-no	róshki,
笹竹(の)	やな(の)	く(い)	(を)	作っ	て
竹の築木をこしらえて逆さまに立て、					
				逆さまに	立て

アイヌ語では方角を示すのに主に川の流れが基準として用いられます。パナ Pána は「川下の方に」、ペナ Péna は「川上の方に」を意味し、パナンペ Pánampe はもともとパナ・アン・ペ pána-an-pe 「川下のほうにいるやつ」、ペナンペ Penampe はペナ・アン・ペ 'pena-an-pe 「川上のほうにいるやつ」という形と意味だったと考えられています。

パナ、ペナと同類の言葉にパンケ pánke 「川下」とペンケ pénke 「川上」があります。登別には2つの温泉があり、川下の登別温泉はパンケユ、川上のカルルス温泉はペンケユと呼ばれていました。

ヌプルペツから ~ 登別アイヌの世界 ~

アイヌ・ネノ・アン・アイヌ 誇り高き男、知里真志保

東京大学を卒業し、北海道大学の教授となった人として知里真志保はあまりにも有名です。東大時代の学友杉浦明平が「知里は北海道をアイヌに返還してくれという願望を持っていたのではないかと彼の死後書いていますが、一生を賭けたアイヌ語研究を支えていたものは「アイヌの自立」の悲願であったのです。東大在学中の故郷登別でのアイヌ語採集の時に「本当の日本人なら、本当の日本語であるアイヌ語を勉強しなければならないのだ」と語っていた(砂沢クラ談)のも日本国土に先住していたアイヌとして言語を回復することこそが民族自立への道と信じたからでしょう。

後年、ジョン・バチラーのアイヌ語辞典や多くの日本人研究者たちにも容赦なく切り込んで行きましたが、誤ったアイヌ語解釈を許すことができなかつたからではないでしょうか。

登別のアイヌとして1909年に名門カンナリの血を継ぎ知里家の次男として生まれました。和人の侮辱と差別の鋭い矢を受けながら、室蘭中、一高、東大を卒業、樺太豊原女学校の教員を経て北海道大学の教授への道を歩みます。同僚の武田泰淳が「北海道独立論、アイヌの土地はアイヌに返せなど鋭い言葉が口をついて出た」と「アイヌの生んだ天才」に記していますが、彼の学術探求の精神を支えていた本音であったのでしょうか。

彼の死後に巻き起こったアイヌ復権闘争の担い手たちの精神的支柱は知里真志保の「俺はアイヌだ」と昂然と胸を張って生きた確固たる52年の人生(1961年6月死亡)そのものでありました。

萱野茂氏、故人となった結城庄司、新谷行たちはいずれも知里真志保の生き方が大きな励みとなっていたと言っています。

アイヌ語研究の成果は北海道新聞文化賞、朝日文化賞の受賞となり、アイヌ語学を言語学の一分野として確固たるものにしたその業績は誠に大きいものがあります。

(ヌプルペツ Nupúrpet は、現在の「登別」のもとになったアイヌ語地名です)

アイヌ語をもっと学びたい方へ

トブ ウライニ エホロカノ ロシキ
tóp urai-ni ehórka-no róshki
竹の築木を逆さまに立てた

アイヌ語の動詞には単数形と複数形の違いのあるものがあります。ロシキ róshki は単数形アシ ashi 「立てる」に対応する複数形です。「パナンペが竹の築木を立てる」と言うところに複数形が用いられているのは竹の築木が何本も立てられたことを意味しているのです。

 今日のポイント
キムネカシ
kimún ekashi

今日の一言：

キムネカシ エク ワ オニンコッ
Kimún ekashi ék wa onínkot!
山の翁よ来て滑れ



カシケ ベカ
kashike peka
その上 に
その上に

ウパシ ピラサ ヒネ ワッカ チャリ ワ ルプシカ、 オロワ
upásh pirása hine wákka charí wa rupúshka, orowa
雪(を) 広げ て 水(を) まい て 凍らせ それから
雪を広げて水をまいて凍らせ、さて

エネ ホトゥイパイ 「キムネカシ エク ワ オニンコッ！」
ené hotúipa-i: “ Kimún ekashi ék wa onínkot! ”
叫んだこと 山の翁よ) 来 て 滑れ
叫んで曰く「山の翁よ来て滑れ」

- アリ イタカワ キムネカシ シノ ヌペツネ ワ サニネ、
- ari iták awa kimún ekashi shíno nupétne wa sán ine,
と 言うと 山の翁(は) 本当に 喜んで で 出てきて
- というと山の翁は大喜びで出てきて、

キムネカシ kimún ekashi「山の翁」は、キム・ウン・エカシ kim-un-ekashi「山・にいる・おじいさん」ということで、ここではクマを指しています。ウン ún「～にいる」は、たとえばヌプルペトウクル Nupúrpet-un-kur「登別に住んでいる人」のように用いられます。キム kim はピシ pish「浜」に対する言葉です。kim-un-kur「山に住んでいる人」に対して「浜に住んでいる人」はピスンクル pis-un-kur と言います。

金成太郎

アイヌで初めて室蘭の小学校で学び、後に札幌の教員養成学校（現在の北海道教育大学札幌分校の前身）を卒業して小学校教員の免許状を手に入れます。また、英語も学び、アイヌ語、日本語、英語に堪能な秀才と言われました。アイヌの将来のためには教育が一番重要なことであると、アイヌだけの学校を作ろうと当時の政府に働きかけましたが実らず、明治18年にはイギリス人宣教師ジョン・バチラーと共に幌別に私立相愛学校（後の愛隣学校）を作り、アイヌ語のローマ字教育なども試みたようです。知里幸恵やその母のナミ、伯母の金成マツたちと非常に濃い血でつながっている人です。惜しむらくは30歳の若さで没したことです。

函館の愛隣学校は有名ですが、幌別に建てられた相愛学校（愛隣学校）が室蘭郡役所より取り壊しを命じられたことから、日本聖公会によって函館に建てられたものだと言われています。この函館の愛隣学校には登別からは金成マツ・ナミの姉妹、トノレッキ、シヌレッキ、トウベの5人が学びました。

アイヌ語をもっと学びたい方へ

エネ ホトゥイパイ 「キムネカシ エク ワ オニンコッ！」 アリ イタカワ
ené hotúipa-i: “ Kimún ekashi ék wa onínkot! ” ari itak
awa

（パナンペが）叫んだこと「山の翁よ来て滑れ」と言うと

会話文を引用する時は、ホトゥイパ「叫ぶ」のような発話行為を表す動詞をエネ...イで挟み込み、「（叫んだ）こと」のような名詞句にします。

 今日のポイント
オニンコツ ヤン。 Onínkot yan!

今日の一言：
オニンコツ ヤン。
Onínkot yan!
すべりなさい

「ホクレ パナンペ ホシキノ オニンコツ ヤン」 - アリ イタク
“ hokúre Pánampe hóshki-no onínkot yán!” - ari iták
さあ パナンペ 先に 滑り なさい と 言った
「さあパナンペ先に滑れ」 - という

ワクス、 パナンペ シノ ヤイコシネレ ワ トオフ フルキタイケ
wa-kusu, Pánampe shíno yáikoshnere wa toóp húr-kitaike
ので パナンペ(は) とても 身を軽くし て ずっと 丘の頂上
ので、パナンペはできるだけ身を軽くして山の頂

ワ チャラルセ ワ ラン。 ソンノ シク オロ
wa charárese wa rán. Sónno shík oro
から 滑っ て 降りた 本当に 目(の) ところ(を)
から滑って降りた。ほんの瞬く

クシテク ラタ シレバ
kúsh-tek rá-ta shirépa.
さっと横切る(ように) 下に 着いた
間に地面に着いた。

ユカヲを語る人々

大学ノート2万ページにアイヌのユカヲの数々を書き残した金成マツは母親のモナシノウクが語ったものをローマ字で表記したものとされています。知里真志保は金成マツの周りにはユカヲの名人がたくさんいたと述べてますが、金成マツの育った幌別地方には、ハウエリエとか、ハウンテのようにハウ háw「声」を含んだ名前や、イタクとかイタキのようにそのまま「言葉」(イタク itak)という意味になる名前の人が多くいました。

知里真志保の祖母に当たるモナシノウクは、胆振地方でも名高いユカヲの語り部であり、吉凶をも星を見てぴたりと当てたと言われています。

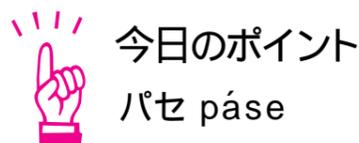
アイヌ語をもっと学びたい方へ

ヤイコシネレ
yái-koshne-re
自分を軽くする

コシネ koshne は「軽い」「軽くなる」を意味します。ヤイ yai- は再帰接頭辞と呼ばれるもので日本語の「自分(を)」に相当するものです。また、レ-re は使役接尾辞と呼ばれ「(誰かに)何かをさせる」というものです。全体で「自分に軽くなることをさせる」つまり「自分を軽くする」ということとなります。アイヌ語の動詞にはこのように複合的なものがきわめて多いのです。

話し手が聞き手に命令したり、促したりするときは動詞をそのまま使います。たとえば、オニンコツ Onínkot! 「すべれ。」

ていねいに促すときや、聞き手が複数いるときは、末尾にヤン yan を添えます。たとえばイク ヤン、イペ ヤン。Ikú yan, ipé yan! 「お飲みください、お食べください。」あるいは「さあ皆さん、飲みなさい、食べなさい。」



今日のポイント

パセ páse

今日の一言：

パセ カムイ
páse kamuy
尊い神



ネアンペ キムネカシ ヌカッ チキ シノ エヌベツネ、
Néampe kimún ekashi nukát chiki shíno enúpetne,
それ(を) 山の翁(は) 見 て 大いに 喜び
それを山の翁は見て大いに喜び、

ミナ トウラ フルキタイ ワノ オニンコッ ワ ラナワ、
mína tura húr-kitai wano onínkot wa rán awa,
笑い とともに 丘の頂 から 尻滑りをし て 降りると
にこにこしながら山の頂から滑り降りると、

シノ パセブ ネクス、 フルホントモタ オトムブイエ トブ オツケ
shíno páse-p né-kusu, húr-hontomo-ta otómpuye tób ótke
大変に 重いもの だから 丘の斜面の途中で 肛門に 竹が 突き刺さっ
大へんに重いものだから、坂の途中で肛門に竹が突き刺さっ

ワ、 シノ アヲカブ ネ クス ライ オロペレケ ポロ ハウエ サンケ
wa, shíno árkap ne kusu rái órperke poró hawé sánke
て ひどく 痛んだの だ から 激しい 破れるような 大きな 声(を) 出し
て、ひどく痛んだので、破れるような大声を出し

コロ テシケテシケ コ、 オルン ポオ アヲカ。
kor téshke-téshke ko, orún poó árka.
て 身をそらせそらせする と そのとき ますます 痛んだ
て身をもだえさわぐと、ますます痛んだ。

パセ páse はテキストでの用例のように、「重い」という意味で用いられますが、カムイノミ kamúynomi (神への祈り) をするときには言われるパセ カムイ páse kamuy 「尊い神」のように神の位の高いことも表します。

偉大な筆録者金成マツ

金成マツは、ハウエリエ (金成恵理雄) とモナシノウク (茂奈之) の次女として生まれました。アイヌ名をイメカノ、和名を廣知 (まち)、キリスト教の洗礼名をマリアと言いました。小さい時に事故で足が不自由になり、生涯松葉杖とともにする生活となりました。16歳の時に函館の愛隣学校に学び7年間在学、22才のときにバイブル・ウーマン (聖書研究指導員) として平取町の教会に赴任しました。33才の時に旭川の近文講義所に転勤、ここで、母のモナシノウクと姪の知里幸恵と3人の生活をはじめます。42才の時に金田一京助と違い、52才の時、知里幸恵の七年忌に上京、金田一宅でユカラの筆録を始めたのがきっかけとなり、以後、マツの筆録したユカラは大学ノート2万ページを超えるものとなりました。金田一京助に92のユカラと8つのウウエペケレ、12の歌謡を、知里真志保には151のウエペケレと6つのユカラ、歌謡など58を残しました (『岩波講座日本文学史』第17巻「伝承と伝承者一金成マツ」蓮池悦子著)。

録音機のない時代、ひたすらに書き残した金成マツもアイヌ語とアイヌ文学を残すことがアイヌ復興になることを信じたからこそなのでしょう。残されたユカラの日本語訳の作業はまだ続いております。

1964年4月6日死亡。姪の知里幸恵の墓標とともに金成マツの十字架の墓標は登別のハシナウシ (Has-inaw-us-i) の丘に静かに建っています。紫綬褒章、登別文化功労章受章。

アイヌ語をもっと学びたい方へ

シノ パセブ ネクス
shíno páse-p né-kusu
大変に重いものだから

ブ ネ p né 「ものだ」「のだ」を取り除いてシノ パセ クス shíno páse kusu 「大変に重いから」としても意味にはわずかの違いしかありません。このようなところは日本語とそっくりです。次の行のシノ アヲカブ ネ クス shíno árkap ne kusu 「ひどく痛んだのだから」もシノ アヲカ クス shíno árka kusu 「ひどく痛んだから」と言っても意味にはわずかの違いしかありません。

今日のポイント
スマウエ コロ
shúmawe kor

今日の一言：

キムネカシ レクチ ヌンパ スマウエ コロ、
kimún ekashi rekúchi númpa shúmawe kor,
山の翁の喉を締めて殺し、



パナンペ ホユブ ワ
Pánampe hoyúpu wa
パナンペ(は) 走っ て
パナンペは走って

エキネ キムネカシ レクチ ヌンパ スマウエ コロ、
ék ine kimún ekashi rekúchi númpa shúmawe kor,
来て 山の翁(の) 喉(を) 締めて 殺し
来て山の翁の喉を締めて殺し、

リ ワ インカラ コ ソンノ ピエ。 パナンペ シノ ヌベツネ、
rí wa inkar ko sóнно piyé. Pánampe shino nupétne,
皮を剥いで みる と 本 当 に 脂 が の っ て い た パナンペ(は) 大 変 喜 ん で
皮を剥いてみると大へん脂がかった。パナンペは大喜びで、

ケット ピエ カム エ ワ エピリカ コラナワ、
kesh-to piyé kam é wa epírka kor an awa,
毎日 脂ののった 肉(を) 食 べ て よい暮らしをして いると
毎日脂がかった肉を食べて暮していると、

「殺す」ことは普通ライケ ráyke と言いますし、魚とシカを捕ることはコイキ kóyki と言います。クマを捕るとか殺すというときにはライケとかコイキとは言わず、敬ってスマウエ コロ shúmawe kor と言います。また、クマ祭り(イヨマンテ iyómante)でクマを送るときには2本の丸太に首を挟んで絞め殺します。スマウエ shúmawe は人間に迎えられた(捕らえられた)神(クマ)の肉体のことです。神(クマ)は自分の肉体を土産として人間のお客となります。ハンティングとは神を迎えることにほかなりません。

知里幸恵の墓標

知里幸恵は1922年(大正11年)9月18日、東京の金田一京助のところで『アイヌ神謡集』の校正とアイヌ語の研究をともにしていたのですが、突然の心臓発作により急死しました。その墓は東京雑司が谷の霊園にありましたが、1975年(昭和50年)に現在の登別市富浦霊園に改葬されました。お参りする人も多く、墓前にはいつも花が絶えません。アイヌが長い間語り継いだ文学をローマ字で表記し、さらに美しい日本語訳を添えました。シロカニペランラン ピシカン、コンカニペランランピシカン「銀のしづく降る降る周りに、金のしづく降る降る周りに」と、アイヌ語も日本語も響きの良い詩編とも言うべき1冊の『アイヌ神謡集』を残して19才の短い人生を終えました。

アイヌの人々がハシナウシ(Has-inaw-us-i)と言った小高い丘に知里幸恵の墓標は建っています。

アイヌ語をもっと学びたい方へ

epírka

エピリカ

~によって良い暮らしをする

ピリカ pirka は、「良い」「美しい」「正しい」「豊かだ」などを意味する自動詞ですが、ここでは「良い暮らしをする」の意味で用いられています。これに接頭辞のエ e- が付いてエピリカ epírka となり、「(脂ののった肉)によって良い暮らしをする」という意味の他動詞になっています。

 今日のポイント
ニシパ nishpaと
カッケマツ kátkemat

今日の一言：
イペノ ニシパ
ipe-no nishpa
美食の長者

オロタ ベナンペ エク ワ、
orota Pénampe ék wa,
そこへ ベナンペ(が) 来 て
そこへベナンペが来て、

「ウネノ ウェナナワ ネコナ アコロ パナンペ エネ
“ Unéno wén an awa nékona a-kór Pánampe ené
同じく 俺たちは貧しかったのに どうして 俺の パナンペ(よ) こう
「同じく貧しかったのに、どうして我(が)パナンペよこう

イペノ ニシパ ネ ルウェタアン」 - アリ ハウエア。ン。
ipe-no nishpa ne ruwe-ta-an? ” - ari hawéan.
美食の 長者(に) なった のか」 と 言った
美食の長者になったのだい」 - と言った。

ニシパ nishpa は「お金持ち」「旦那さん」あるいは上の例のように「長者」などと訳されますが、本来は神々の恩寵にあずかる人、すなわちハンティングの名人のことだったと思われる。ハンティングとは神を人間の世界に迎えることに他なりませんから、ニシパは神々を迎え入れ、もてなし、再び神の世界に送り返すことのできる男性です。そのような人はラメトク ramétok、勇敢であり、パウエトク pawétok、雄弁家であり、テケトク teketok、手先が器用で彫刻に長けた人に決まっています。このような人が神を迎え送る祭りを主宰し、コタンのリーダーとなったのだと考えられます。カッケマツ kátkemat とはそのような男性とむすばれるだけの器量のある女性のことです。

自由の天地

知里幸恵は『アイヌ神謡集』の序文で「その昔この広い北海道は私たちの先祖の自由な天地でありました」と述べていますが、幌別地方（現在登別市）は1857年（安政4年）頃は「幌別場所」と言われ、岡田半兵衛が支配しておりましたが、266人のアイヌの人たちが住んでおりました。そこではまだアイヌ語が話され、アイヌの宗教行事が行われておりました。

明治新政府ができて、明治3年、仙台藩の支藩、片倉家が主従ともども移住してきました。その時アイヌの人口は男153人、女161人、314人であったとの記録があります。

アイヌ語をもっと学びたい方へ

ウェナン wén-an 私(たち)は貧しい

アコロ a-kór 私(たち)は~を持っている; 私(たち)の~

アイヌ語の動詞は人称を表示するものが付いて用いられるのが普通です。一人称(話し手)を示すときは、自動詞ならば後ろにアン -an が付き、他動詞ならば前にア a- が付きます。

カムィチェブ（神魚）とペツカムィノミ（川神祭り）

知里真志保博士は『アイヌ語入門』の中で「アイヌはもともと海岸線に沿って、川のそばに点々として部落を作っていた。そして、内陸の交通は主として川によったのである。部落の近くを流れる川をさかのぼって、サケやマスの類をとったり、クマやシカをとったりして暮らしていたところから、そういう生活に即して、川は海からさかのぼって山に行くもの、という考え方が自然に生まれたのであろう。」と、記している。地名がつけられた古い時代の話であるが、アイヌにとってサケと川は生活の基本で欠かすことの出来ないものでありました。厳しい冬を越すための食料として、産卵が終わる頃に大量に捕獲し、サツチェブ（干し魚）にして保存し、特に食料の得づらい冬場には干した山菜といっしょに煮てオハウ（魚汁）として食べていたのです。ですから、アイヌにとって鮭は主食であり、カムィチェブ（神の魚）として大切に扱っていました。秋になり、最初に川に上ってくる鮭をアシリチェブ（新しいサケ）として出迎え、与えてくれた神々にお礼と豊漁のお願いのお祭を行うのが、習わしでした。

しかし、明治政府が出来るとこのように主食であったサケやシカの捕獲が一方的に禁止され、生きるすべであったサケやシカをとると密漁（獵）といって逮捕され、生存権がおびやかされました。他方では、国策の企業が興り鹿肉の缶詰工場が造られるなどして、富国強兵政策の重要な産業となったのです。

このようなアイヌを無視して行われてきたことを正すべく結城庄司を中心にアイヌの復権を掲げた新たな運動が展開され、北海道の中心である札幌のど真ん中で「アシリチェブノミ（新しいサケを迎える儀式）」が復活されました。この行事はマスコミにも大きく取り上げられ、アイヌと神（自然）との結びつきをアピールする有効な手段でありました。

こうした行事を参考に登別で始められたのが「ラオマツカムィノミ」でした。ラオマツという古来からのサケを捕獲する道具を作成し、「捕獲実験」という名目で捕獲を行ったのが12年前でした。当時、北海道からの許可を得たのがたったの5匹でした。それも、文書を何度も再提出して、大変な抵抗を乗り越えてのことでした。現在は、知里博士の資料に則って「ペツカムィノミ（川神祭り）」として本年で13回目を迎えることになり、捕獲許可数も増えております。

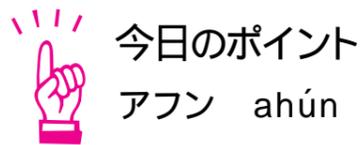
くじら岬のお話

登別市の登別漁港と鷲別川の川口に2つの岬があります。登別漁港のところの岩山は採石されて形が大きく変わっていますが、土地の人はフンベ山（くじら山）と呼んでいますし（アイヌ語ではフンペサパ húmpesapa）、鷲別のほうをくじら岬と呼んでいます。

2つ合わせると大きなくじらのような形になり、登別の方が頭の部分で、鷲別の方が胴体から尾にかけた部分と言えましょう。この2つの岬についてアイヌの間に次のように語り継がれている話があります。

登別の方の海にシヨキナ shiyókina という大きな怪魚が住んでいて、魚でもくじらでも何でも食べてしまう。人間の乗った舟までも食べてしまうので、神様がカワウソに命じて退治してとらえることにしました。かわうそが見事に退治して、シヨキナを2つに切って頭を登別のほうに、胴体の部分を鷲別に置きました。それが現在のフンベ山でありくじら岬となったと言われております。

シヨキナはくじらのような形をしていた巨大な怪魚だったと言います。怪獣の話は大昔からあったものらしく英雄物語のユカㇿにも巨大な怪獣がたびたび出てくるようです。



今日のポイント
アフン ahún

今日の一言：

ホクレ アフン。
Hokúre ahún!
さあ、入りなさい



「ホクレ アフン ワ イベ コロ エパシクマアン チキ
“ Hokúre ahún wa ipé kor epáshkuma-an chiki
さあ 入っ て 食べ ながら お前さんに教える から
まあ入り、食べながら教えるから

ネノ イキ ワ エピリカ！」 - アリ パナンペ イタカワ、
néno ikí wa epírka! ” - ari Pánampe iták awa,
そのように し て もうけな と パナンペ(が) 言うと
そうして儲けな！」 - とパナンペが言うと

アフン ahún は家の中などに入ることを意味します。登別にはアフンルパル Ahún-ru-par と呼ばれるすり鉢形の窪地があります。あの世（死の世界）への入り口と信じられていました。知里真志保と山田秀三の二人によってその存在が確認されました。パル párl は「口」のこと、ル rú は「道」のことです。

アイヌ語地名研究者、山田秀三

アイヌ語地名研究に独自の方法を確立した地名研究家として名高い山田秀三（やまだ・ひでぞう）も幌別地方に非常に縁の深い人です。

1899年（明治32年）に東京生まれ、1924年（大正13年）に東京大学卒業の高級官吏となりますが、退官後の1949年（昭和24年）登別市にある北海道曹達の社長に就任します。

アイヌ語は金田一京助に学び、地名の語源を現地の地形に即して考える実証的な研究は「山田流」と言われる独自のものでした。

登別出身のアイヌ語学者、知里真志保とは親友で、二人の共著『あの世の入り口』『幌別町のアイヌ語地名』『室蘭市旧地名考』などがあります。

その他「北海道の旅と地名のアイヌ語」のように全くの素人が読んでも理解できるようにアイヌ語地名が解説されている本もあり、丹念に、ていねいに書かれたイラストが読む人をアイヌ語地名の世界へ引きずり込んでしまいます。

1992年（平成4年）9月27日死亡。93才。北海道文化賞、北海道新聞文化賞。上記著書のほか、『東北と北海道のアイヌ語地名』『北海道の川の名』等の著書多数。『アイヌ語地名の研究』全4巻に集大成されています。

アイヌ語をもっと学びたい方へ

エパシクマアン
e-páshkuma-an
お前さんに教えてあげる

「私（たち）がお前さんに...する」というように、主語が一人称（話し手）で、目的語が二人称（聞き手）となるときは、このようにエ e-「お前に」とアン -an「私（たち）が」で動詞をはさんだ形が用いられます。

今日のポイント
トイ~ ウェン~
tói ..wén ...

今日の一言：

トイ パナンペ ウェン パナンペ
tói Pánampe wén Pánampe
憎いパナンペ、悪いパナンペ

センネカスイ ベナンペ イキ クニ パナンペ ラム アイ
sénne-ka-sui Pénampe ikí kuni Pánampe ramú a-i:
まさか...しまい ベナンペ(が) そうする と パナンペ(は) 思ってい たのに
まさかベナンペがしようとパナンペ思わなかったのに、

「トイ パナンペ ウェン パナンペ、 ホシキ タシ アキ クスネフ
“ tói Pánampe wén Pánampe, hóshki tashí a-kí kusu-ne-p,
憎い パナンペ 悪い パナンペ 先に まったく 俺がし ようとしたのに
「憎いパナンペ悪いパナンペ、先に俺がしようとしたのに、

エイエトウシマク！」 - アリ イタク コロ アバ オッタ ポン オソマボ
e-i-yetushmak!” - ari iták kor apá otta pón osómapo
お前は俺を出し抜いた と 言い ながら 戸口 に 小さな うんち(を)
出し抜きやがって！」 - と言いながら戸口に小糞を

キテク アバサマケ コクッチテク、 テレケ ワ キムタ オマン ワ
kí-tek apá-samake kokúchit-tek, térke wa kím-ta omán wa
さっとして 戸口のそば(に) さっと尿を引っ掛けて 走っ て 山に 行っ て
し戸の側に尿を引っ掛けて、走って山へ行って

パナンペ エネイキイ ネノ エユカラ ワ
Pánampe ené-iki-i néno eyúkar wa,
パナンペ(が) したこと(の) ように 真似 て
パナンペのした通り真似て、

昔のアイヌは土(トイ tói)を卑しんだらしく、物語の中では、憎らしい相手に対してトイ~、ウェン~「土の~、悪い~」という対になった修飾語をその名前に冠して罵ります。なお、知里真志保は、このトイが墓の意味を表したとしています。このような悪口でトイが用いられるのは死を非常に忌み嫌う習慣があって、そのため悪口として効果的であると述べています。{『知里真志保著作集 2』(280 - 283, 294 - 296)}

カムイノミからアイヌ語教室へ

ペツカムイノミ(Lesson 8)から得た物は、サケばかりではありませんでした。サケを捕獲する以上は、カムイノミをしなければならないということで、萱野茂氏からイナウケ(御幣作り)の指導を受け、カムイノミの祝詞を作ってもらいその祝詞に基づいてカムイノミを行いました。その祝詞の意味がわからないので学習を始めたことがきっかけで「登別アイヌ語教室」が開催されることになりました。アイヌ語のわかる古者が少なく、ほとんど自学自習の状態でしたが、いろいろな方の協力の下、また、アイヌ語講習などを受け、本年からはカムイユカラに挑戦するまでになりました。

また、当時は儀式の衣装が全く無く、全道から応援に駆けつけてくれたウタリから借りてようやく形がついたのでした。そのため、何とか自前の衣装がほしいということで、あちらこちらで勉強し民族衣装の作成に取り組みました。現在では「ピリカノカ(美しい形)の会」を中心にルウンペ(晴れ着)の作成や刺繍やトマ(ござ)編みなどの伝統文化の伝承活動に取り組みしており、毎年展示会を開催出来るまでになりました。

何より一番の収穫は、民族意識の高揚でした。最初の頃は、民族衣装を着て儀式に参加するのは、大変抵抗があり参加者が少なかったものでしたが、今では、みんなが衣装を着て盛り上がるようになりました。

アイヌ語をもっと学びたい方へ

エイエトウシマク
e-i-yetushmak
お前は俺を出し抜いた

今回は「私(たち)がお前さんに...する」をどのように言うか学びましたが、「お前さんが私(たち)に...する」というように、主語が二人称(聞き手)で、目的語が一人称(話し手)となる時は、このようにエ・イ e-i-「お前が・私(たち)を」という複合した接頭辞が動詞に付きます。なお、この接頭辞はエイ ey- と発音されたかもしれません。

今日のポイント
サン sán

今日の一言：
キムネカシ ヌペツネ ワ サン
kimún ekashi nupétne wa sán
山の翁は喜んで出て来て

「キムネカシ エク ワ オニンコッ！」 アリ ホトゥイバ アワ、
“ kimún ekashi ék wa onínkot ! ” ari hotúipa awa ,
山の翁よ) 来て 滑れ と 叫ぶ と
「山の翁よ来て滑れ」と叫ぶと、

キムネカシ シノ シノ ヌペツネ ワ サン
kimún ekashi shino shino nupétne wa sán ,
山の翁(は) 実に 実に 喜んで で 出てきて
山の翁は大いに喜んで出てきて、

「ホクレ ペナンペ ホシキノ オニンコッ！」 アリ イタク
“ hokúre Pénampe hóshki-no onínkot ! ” ari iták.
さあ ペナンペ 先に 滑れ と 言った
「さあペナンペ先に滑れ」と言った

ペナンペ エセ コロ フルキタイケ ワノ オニンコタワ、
Pénampe ése kor húr-kitaike wano onínkot awa ,
ペナンペ(は) 承知し て 丘(の)てっぺん から 滑ったが
ペナンペは承知して山のとっぺんから滑ったが、

サン sán には「山をおりる」「川をくだる」「浜に出る」などの意味があります。
登別川(ヌブルペツ Nupúrpet)は、清い流れのペケレペツ Peker-pet と硫黄を含んだク
スリエサンペツ Kusúri-e-san-pet が合流したものです。クスリエサンペツという川の名の
中にもこのサン sán が見られます。「薬が流れてくる川」の意味です。

カンナリキ (金成喜蔵)

明治時代、幌別(登別)のコタンにカンナリキ(金成喜蔵)という人がおりました。
金成太郎の父親で、金成マツや知里幸恵、知里高央、知里真志保たちと非常に血縁の強い
人です。カンナリキのことを評した当時の新聞の記事を紹介します。
「金成喜蔵は七十有余にて性質正直にて和人、同族両者の間に勢力があり、徳望極めて高
く、金成の言と言へば首を傾けぬ者なしとか。アイヌに稀なる財産家にして数多くの雇人さ
え使役し漁獲、耕作等に従事し其の住家の如き、同村の和人の家に比するも上等の部に入る
べき程にて、耶蘇教を信じ煙草一服、酒一滴も飲まず...」(北門新報。明治30年7月7日)と
書かれるほどの男で、幌別コタンの雄といえるでしょう。

アイヌ語をもっと学びたい方へ

エセ
é-se
「はい」と返事をする

語頭のエ é はアクセントの頂にあり、心持ち長く発音されます。
このエ é は日本語の「はい」に相当するものです。「いいえ」と言うときはソモ somó
と言います。ここでは「はい」のエ é に動詞を作る接尾辞セ -se が付いて、全体で「はい
と返事をする」(承知する)という意味の自動詞になっています。

今日のポイント

エキムン ekimun と
オキムン okimun

今日の一言：
エキムン オマン ワ イサム。
ekimun omán wa isám.
山へ行ってしまった

ヤイコシネレ クニ オアロイラ クス、パセ ヒネ オトンブイエ
yáikoshnere kuni oár oira kusu, páse hine otómpuye
身を軽くす べきこと(を) すっかり忘れた から 重く て 肛門(に)
身を軽くしていることをすっかり忘れたので、重くて肛門に

トプライニ オッケ エアシカ ライエコツチャ。
top-úrai-ni ótke eáshka rayékotcha.
竹(の)やな(の)く(い)が) 突き刺さって それこそ 死ぬように痛んだ
竹のやなくいが突き刺さってそれこそ死ぬように痛んだ。

キムネカシ シノ イルシカ ワ、ペナンペ オッタ テレケ ワ
Kimún ekashi shíno irúshka wa, Pénampe otta térke wa
山の翁(は) ひどく 怒っ て ペナンペ(の) ところに 駆け て
山の翁はひどく怒って、ペナンペの所に駆けて

エク ワ、トイコ キクキク トイコ ライケ ワ、エキムン オマン ワ イサム。
ék wa, tóiko kikkik tóiko ráike wa, ekimun omán wa isám.
来 て 激しく 打って打って 激しく 殺し て 山へ 行っ て しまった
来て、打って打って打ち殺して、山へ行ってしまった。

川の流れる向きを基準として方角が示されたことは Lesson 2 で触れました。その他にも
エキムン e-kim-un 「山の方へ」、オキムン o-kim-un 「山の方から」とかエピスン é-pis-un
「浜の方へ」、オピスン ó-pis-un 「浜の方から」のような言葉も用いられました。キム
kim は「山」、ピシ pish は「浜」の意味です。

登別でのアイヌ復権運動の流れ

登別は、「知里真志保」「知里幸恵」の出身地として全国的にも有名で、幸恵の墓には全
国から多くの方が訪ねてきています。しかし、「登別における彼らに対する対応は？」とい
うと、1973年（昭和48年）に出身校である室蘭中学校（現室蘭栄高等学校）の同窓生達や
町内有志が顕彰碑を建立し、町内会の住民達が維持活動を行っている程度でありました。ア
イヌ文化についても、知里真志保先生が「外国語を学ぶように、アイヌ語を学んだ」と語っ
ているように、アイヌ語会話やアイヌの風習はほとんど残されておりました。という
のも、江戸時代には幌別場所（場所請負制度）が開かれた上に、明治初期に隣町の室蘭に国
営企業が設立され、その影響で和人が急増したために、アイヌ文化が急速に失われたからで
す。ウタリ協会の支部活動においても、差別の厳しかった状況からその運動は停滞を続けて
おりました。

ところが、20年ほど前に和人の有力者がアイヌの墓を破壊し、その上に自分の一族の墓を
建てるという暴挙が行われたのです。その事件を契機に、有志が結城庄司氏の支援を受け立
ち上がり、支部の再建に取り組みました。支部の再建の一環として、登別出身の知里真志保
を顕彰していく活動を起すとともに十数回の講演会や展示会を開催し、市民へのアイヌ文
化の啓蒙を行って来ております。また、アイヌ語教室への参加も市民に呼びかけています。
アイヌもシサム（大切な隣人）も一緒に活動する中で、本当の意味での共生の出来る社会を
作ってゆければと思っています。

アイヌ語をもっと学びたい方へ

トイコ キクキク トイコ ライケ
tóiko kikkik tóiko ráike
打って打って打ち殺す

相手に対して激しい衝撃を与えるような動作を表すとき、よくトイ・コ foi-ko- という
接頭辞が動詞に付けられます。「土・とともに」という意味ですが、相手を打つなどして勢
い余って地面をも叩くということがトイ・コ本来の意味だったと思われます。

 今日のポイント
トイ ライ ウェン ライ
tói rai wén rai

今日の一言：
トイ ライ ウェン ライ キ
tói rai wén rai kí
つまらない死、悪い死を遂げる

オカケタ ペナンペ トイ ライ ウェン ライ キ ワ イサム クス、
Okáke-ta Pénampe tói rai wén rai kí wa isám kusu,
その後で ペナンペ(は) つまらない 死 悪い 死(を) し て しまった から
その後でペナンペはつまらぬ死悪い死を遂げてしまったのだから、

タネ オカイ ペナンペ イテキ イタクカシ ヤン！
tane okái Pénampe itéki itákkashi yán!
今 いる ペナンペ(たちよ) するな 逆らう よ
今いるペナンペたちよ、決して逆らいごとをするんでないぞ、

アリ ペナンペ イタク
ari Pénampe iták
と ペナンペ(が) 言った
とペナンペが言った。

トイ ~、ウェン ~「土の~、悪い~」が憎い相手を罵るときに用いられることは Lesson 10 で触れました。ここでは罵りというよりも死に様の悪さ、ひどさを表しています。多くのウエペケレで、悪者役は必ずといっていいほどこのような死に方をします。そして死後、子孫たちに同じ過ちを繰り返すなど諭して物語が閉じられます。

アイヌとシサムの共生をめざして

登別ではアイヌとシサムの共生をめざしてアイヌ語教室やピリカノカの会と一緒にやっておりますが、一緒にやるといっても、立場も違い難しい点もあります(シサムはアイヌ語で和人のことでシサム sisam と発音されます)。

アイヌにとっては、民族としての誇りを持ち、差別を乗り越え正々堂々と自分たちの考えを主張し、問題を解決していくことが大切です。一方、シサムにとっては、アイヌ文化や歴史へ関わるのが自らの文化や歴史を見直すこととなるでしょう。自然と調和して生きてきたアイヌの精神を学ぶことは環境破壊が進む現在、人類がどう生きて行くべきかを示唆するものであります。また、特に北海道に住むシサムにとっては、一方的に奪ったアイヌモシリの中でどう生きて、歴史的な問題をどう解決して新しい社会を作っていくのかが大きな課題となるでしょう。

アイヌの置かれている現状は、アイヌ文化法が出来た現在も依然として厳しいものがあります。各種の文化事業を行なっても日々の生活に追われて参加することがなかなか大変です。アイヌ文化法が真にアイヌとシサムのためになるように活用されることが望まれます。このラジオ講座が、その一助になればと思います。

アイヌ語をもっと学びたい方へ

タネ オカイ ペナンペ
tane okáy Pénampe
今いるペナンペたち

オカイ okái はアン án「いる」「ある」の複数形です。ペナンペ Pénampe が「ペナンペたち」と複数の意味で訳されているのはそのためです。単数形のアン án は Lesson 2 の「今日の一言」にありましたね。

なお、この例にあるように、アイヌ語では日本語と同じように動詞が名詞の前に立って名詞を修飾することができます(連体修飾)。